マーティン・ラヴァリオン著／柳原透監訳

『貧困の経済学　上・下』

日本評論社　2018.9　xviii＋x＋38＋115＋803 ページ

本書は，Martin Ravallion, *The Economics of Poverty: History, Measurement, and Policy*, Oxford University Press, 2016 の全訳である．本文とコラムで 604 頁，参考文献一覧だけでも 58 頁(本文内における著者の誘導とともに，この一覧自体が有益である)にもおよぶこの浩瀚な書を，わずか 2 年ほどで訳した 8 名の訳者たちの労を，まずは多としたい．

「経済学とは，つまるところ，貧困の研究である」という力強い言葉の引用から始まる本書は，原書の副題にも示されているように，歴史，測定方法，政策，という三つの局面から，世界の貧困問題に斬り込むものとなっている．しかも特徴的なのは，著者が読者を誘うにあたって，貧困測定に関する数々の統計手法を紹介する第Ⅱ部や，貧困政策をあつかう第Ⅲ部のうち，救済対象者の特定(ターゲティング)に関する第 10 章は，関心次第では読み飛ばしてもらってもかまわないとされる一方，18 世紀末からの 200 年におよぶ貧困の思想史をたどる第Ⅰ部は，必ず読むべき部としてあつかわれている点である．歴史が，数式や統計という「いかにも経済学」的な議論の，単なる「ツマ」や「お勉強」の対象ではなく，世界各地の貧困をどう測定し，どう政策的に解決していくか，という「いま」を考える際，欠かすことのできない重要事として位置づけられているわけである．

であれば，経済学畑の著者がそれだけ歴史に踏み込んできている以上，歴史学側にも本書にきちんと向き合う責務が生じるというものであろう．そしてその際，日本の前近代史を専門とする評者が(『貧困と自己責任の近世日本史』人文書院，2017 年，荒武賢一朗編『近世日本の貧困と医療』古今書院，2019 年)，日本語媒体の本誌でなすべきは，1820 年における世界と日本の絶対貧困率 80% は妥当な推計値なのか，などといったことをあげつらうことではなく ── もちろんそれ自体は，重要な批判点となり得るが ──，日本の貧困(史)問題を考えるにあたって，本書はどのような意義を有し，また逆に，貧困をめぐる日本の過去と現在の歴史的経験は，本書が主軸とする世界の貧困(史)問題にどのような寄与をなし得るのかを検討することであろう．

このとき，日本の貧困問題を解決する「処方箋」を本書に求めてはならない．なぜなら，貧困をなくす条件として本書で詳しく展開されるのは，一定度の経済成長とあわせて，初等教育や健康，法の支配，信用市場，あるいは宛先不明の手紙がきちんと差出人の手元に戻ってくるような行政の安定といった，いずれも，購買力平価が 1 日 1 ドルないし 1.25 ドルに満たない「絶対貧困」の撲滅にまずは向き合わなければならない「途上国」向けの事柄であって，日本をはじめとする「先進国」が直面する「相対貧困」の解決策については，本書の最末尾で，「(絶対貧困の撲滅で必要とされるよりも)遥かに大幅な再分配政策が求められる」と提言するにとどまっているからである．現代日本の貧困に関心をもつ者が本書から読み取るべきは，問題解決に向けての「具体策」ではなく，貧困に向き合うときの姿勢と方法，そしてそれを人類が勝ち取るにいたった歴史的な苦闘と思索の経緯，という点であろう．

貧困が，必要悪ないし不可避な事柄としてあつかわれていた時代から，なくすべき社会悪として「問題化」されていく時代への移行で，本書が注目する歴史上の画期は，①18 世紀末，②20 世紀転換期，③1960～70 年代，④21 世紀転換期，の 4 期である．①の画期性は，工業化と産業革命にともなう大量の賃金労働者の出現によって，彼らの貧困を，もはやかつてのように，本人の「怠惰」といった個人的な事柄にだけ帰すわけにはいかなくなり，政府や国家が責任をもって対処すべき「社会問題」として意識化されるようになったところにあり，②は，その問題解決の前提として必要とされる貧困の調査方法や測定法が発展した時期であって，ロンドンとヨークにおける貧困率を算出したブースとラウントリーの著名な貧困調査も，ローレンツ曲線もジニ係数も，このときに誕生したのであった．さらに，貧困削減にとって大きな転機となるのが③で，1964 年に

「貧困との戦い」を宣言したアメリカに象徴されるごとく，政府・国家による反貧困対策が本格化し，貧困率の公表などを通して貧困に対する人びとの関心が一層喚起された時期であり，その結果，世界の絶対貧困率は1950年以降，明らかに低減傾向に入った．そして，いまにいたる④は，所得給付といった直接介入型の貧困対策が途上国にも広く普及し，絶対貧困の世界的な撲滅が視野に入る一方(2008年段階でなお13億人が絶対貧困下にある)，全世界規模で今度は相対貧困の増加に対処せねばならない段階に入った，というわけである．

「経済学」を銘打つ作品でありながら，著者が，「いかにも経済学」的な第Ⅱ部より，歴史をあつかう第Ⅰ部を重視するのは，おそらく，経済学的な手法から貧困の質と量に迫るとき，そもそもなぜ貧困を「計る」という行為が誕生したのか，個々の統計手法の背景には，経済成長と貧困，不平等をめぐって，どのような思想，価値観が潜んでいるのかを十分理解する必要がある，と考えているからであろう．一見，現状分析に無関係にみえる歴史に注意しなければ，複雑な計算式を操ることに溺れて，細かな表と図をつくって事足れりとするような，「手段の目的化」が生じかねない，という強い危機意識が著者にはあるに違いない．

著者の議論が，18世紀末を基点としていることが象徴するように，本書を前にすると，ヨーロッパ発信の貧困対策が，社会の資本主義化，すなわち賃金労働収入に強く依存する世帯の大量出現と，いかに分かちがたく結びついているか，あらためて気づかされる．17世紀以降のヨーロッパ貧困史研究でつとに指摘されているように，救貧法と救貧税をそなえたイングランドであれ，寄付金が救貧の主たる財源となった大陸ヨーロッパであれ，救貧に対する社会的関心の高まりの背景にあったのは，産業革命以前から重みをもつようになった賃金労働世帯の存在と，彼らの失業という問題であった．多量の賃金労働世帯を前に，貧民センサスや個票などを通して，救済対象者の数と実態を把握しようとする，200～300年級の歴史的な訓練――そのなかには，19世紀末以来の学術上の鍛錬も含まれる――があってこそ，ヨーロッパおよびその延長線上にあるアメリカ社会は，1960年代以降，貧困率を国家としてきちんと公表し，社会に周知して対策を練る，という次元にいたることができたのであろう．

そうした欧米社会の長期的な苦闘と試行錯誤の歴史をふまえると，自営業者にかわって，賃金労働者が社会の基軸となったのが，たかだかこの半世紀ほどにすぎない日本で，生活保護受給者数は公表されるものの，実際の貧困世帯の数と率については，まったくと言っていいほど国家によって明らかにされてこなかったのも，さもありなん，というものである．1950年代までの日本は，賃金労働者の「失業」ではなく，自営業者の「破産」――近世であれば「潰れ百姓」――が問題となる社会であったが，前者と比べれば，後者の方がはるかにその発生構造を科学的に把握(予測)しにくかった以上，貧困に陥りかねない破産者の数と率を公式に把握，公表しようとする力学が生じにくかったのも必定であった．その「不慣れさ」が，賃金労働世帯が大半を占めるようになった1960～70年代以降も，貧困率公表に対する社会と国家の関心が高まらなかった要因となったのであろう．政府や議会のHPをみれば，毎年の貧困率とその推移がすぐに判明するアメリカやイギリスと，2009年にやっと貧困率が公表され，しかもそれですら継続的にはなされない日本との彼我の差には，こうした「資本主義社会としての訓練の深度差」が横たわっているに違いない．

一方，日本の歴史的経験が世界の貧困(史)問題に寄与し得る領域とは，とても悲しいことに，本書でも若干言及される，ターゲティングにともなうスティグマ(恥辱)の問題であろう．義務教育，衛生，保健，治安，安定的な行政，源泉徴収ができるほどの徴税(国民把握)体系など，著者が注目する反貧困の諸条件をそなえるこの21世紀日本で，なぜ生活保護の捕捉率は2割程度にとどまり，行政の水際作戦によって自宅内餓死者まで出てしまうのか．そこには，公的な貧困対策を利用することを「恥」とみなし，「当然の権利」として積極的に使わせないようにする姿勢，そして貧困を「絶対貧困」ないし「極度の貧困 extreme poverty」でしかとらえられない観念が，官民双方に貫かれているのであろう．相対貧困に対してほとんど理解を示さないいまの日本社会が，日本の絶対貧困率がほぼゼロ％になっている図1.1をみれば，おそらく，もうこれ以上生活保

護を充実化させる必要はない，と考えるに違いない．

「先進国」日本におけるこの悲惨な実態を根本的に乗り越えるためには，結局，絶対貧困から相対貧困へ，という本書も採用する「わかりやすい」歴史観ではなく，相対貧困の長期史というまったく新しい視角から，世界の貧困史像を再構築するほかないのではないか．その作業が困難を極めるであろうことは容易に想像できるが，そこに挑んでこそ，「世界市民 a global citizen」として，最貧国基準の貧困さえ免れていればいいという問題ではないとする，著者の提言に応えることにもなろう．世界の「いま」を見つめる著者が，歴史を重視したように，やはり歴史学者の責任は重い．それを痛感させられた一書であった．

［木下光生］